

Title	韓国ソウルを訪れて：翻訳の問題から考える
Author(s)	鈴木, 幸
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.5, 2012.3 : 22-23
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3878
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

韓国ソウルを訪れて — 翻訳の問題から考える —

鈴木 幸

1. はじめに

2011年11月25日、ソウルの長老会神学大学校において第2回韓日キリスト教関係史共同研究セミナーが行われ、著者は一聴衆者として出席させていただく機会を得た。初めての韓国訪問でもあり、仁川空港の入国審査での「ようこそいらっしゃいました」という日本語テロップに違和感を覚えながら、ソウルの街へと向かった。ここでは訪問中に目にした日本語を中心に、翻訳・通訳の問題から以下に報告したい。

2. 不思議な日本語

ソウルを歩いていると、いたるところで日本語が目に入った。地下鉄に乗るために切符を買おうとすれば、表示言語に「日本語」を選ぶことができ、電車のアナウンスも大きな駅に着く前には日本語が流れた。しかし、観光名所を訪れたとき、また滞在先のホテルでも、違和感を覚える日本語と出会うことがあった。たとえば、ある観光地の日本語パンフレットには「観覧情報」と記されている。英語版では“Visitor Information”と書かれており、つまり「ご利用案内」や「観光案内」と日本語では表現される言葉である。また同じパンフレットには、英語版で“adults”と“children”、つまり「大人料金」と「子供料金」にあたる個所が、実際は「大人」と「青少年（7歳～18歳）」とに分かれていた。「青少年」という日本語は存在する。しかし、「料金」と「青少年」の結びつきは連想されにくいことから、言葉は単語ひとつで存在するというよりは、言葉と言葉の結びつきが重要であること、言語の規範があること、そしてその結びつきによっては違和感を覚えさせることがあることを実感した。また別の例をあげれば、ホテルの案内パンフレットには「コンシアジ」と

表記されており、“concierge”の英語発音からそうなったことは推測できたが、しかし『広辞苑』をみてもフランス語発音に似せた「コンシェルジュ」が一般的な日本語である。日本語には外来語が多く含まれていて、その多くは確かに英語からの借用語ではあるが、時にそうではないこともあることを改めて思い起こされた。

3. 「三・一独立運動と民族自決主義」

ところでセミナーの話に移るが、長老会神学大学校と聖学院大学総合研究所の共同研究セミナーは、「三・一独立運動と民族自決主義」を主題に行われた。三・一運動とは1919年3月1日に日本統治時代の朝鮮において起こった独立運動である。長老会神学大学校研究教授の李致萬氏による発表「三・一運動の準備過程におけるキリスト者の役割」と、その発表に対する聖学院大学総合研究所特任教授の松谷好明氏の応答、聖学院大学総合研究所助教の松本周氏による発表「1910年代の韓日教会とリベラル・デモクラシー：現代が学ぶべきこと」と、その発表に対する長老会神学大学校教会史研究部実行委員の朴ヨンコン氏の応答がなされた。

筆者が特に興味を持ったことは、松本氏の発表にあった、“democracy”の表記問題をはじめとする翻訳・通訳の問題である。発表によると、日本語においても韓国語においても「民主主義」と訳される言葉ではあるが、しかし、それぞれの国で考える「民主主義」の意味合いには相違が生じるところであった。（そのため、松本氏はあえて英語表記を用いていた。）また、通訳の問題において、特に松谷氏の応答が韓国語に訳された時、日本語と韓国語の両方が分かる方の説明によると、通訳者自身の意見が大いに含まれた通訳だったという。つまり通訳者が、聴衆にわかりやすいよう

に伝えようとする意図と、また通訳者自身の解釈をも伝えたいという意図（それが故意にせよ、無意識にせよ）が折り重なって、本来の発話者の意図が伝わりにくくなる可能性も大いにあるということが認識された体験であった。

4. おわりに

筆者の韓国語知識が乏しいことから、直接に語用の相違に気づくことができなかったことが残念である。しかし、「近い」といわれる日本語と韓国語の間にも表面上だけでは分からない違いがあることに気づくことのできた有意義な訪問であった。

（すずき・みゆき 聖学院大学総合研究所特任研究員）